

明日、  
君を食べる  
よ

君を食べた日、

僕は、

本当の「いただきます」の意味を

知ったんだ。

## 「登場人物」

さなぎ (12)

わがままな一人っ子。大人の事情に振り回される不運な自分を可哀想だと思っている。

みぞれ (15)

気が強くておてんばな女の子。さなぎにとっては、目の上のたんこぶだが、密かにお姉ちゃんとして優しい面を持つ。

タモツ (40)

他人に自慢しにくい父親。虫も殺さぬような控えめな男だが、屠殺場で動物を殺す仕事をしている事に葛藤していたりする。親の紹介で、ヨツバと再婚。

ヨツバ (35)

元シングルマザー。離婚後、さなぎを女手ひとつで育てる。都会の下町で食器を作る職人だったが、タモツと再婚後、田舎の工房に移る。

ヤマビコ

ソバツカス  
カカシ  
こまむすび  
クウネル

【第1場 注文の多い大人がいるレストラン】

大きなフォークや、ナイフを持った人々が登場。  
ガチャングチャンと音を鳴らしている。

やがてその音が大きくなっていく。

その音に合わせて料理がなされる。厨房のようだ。

と同時に運ばれる椅子とテーブル。

バツと広がるテーブルクロス。

かと思えば子供と女の前に素早く運ばれる料理皿。

また別のコックが上の蓋を取る。

フォークとナイフを持った子供がかぶりつくその瞬間

女「はい、ストロップ！」

ぴたりと止まる子供。

他の人物は一斉にその声で消える。

テーブルには、女と子供のみ

(以下、子供↓さなぎ。女↓ヨツバ)

ヨツバ「食べる前に、何か言う事あるでしょ？」

さなぎ「え？」

ヨツバ「あるよね？食べる前にー」

さなぎ 「ママ」

ヨツバ 「そう」

さなぎ 「何かお酒の名称を叫ぶ！」

ヨツバ 「ふざけないの、まだ小学生でしょ！ほら、食べる前に言う言葉」

さなぎ 「言う前に食べないと」

ヨツバ 「だからその前に言う事があるでしょ？」

さなぎ 「だから食べる前に冷めるでしょ、そんな事してたら」

ヨツバ 「いただきます、でしょ？どうして何度も言わせるの」

さなぎ 「(てきとーに) いただいています」

ヨツバ 「こら！ちよっと！」

さなぎ 「何なの、冷めちゃうよ！」

ヨツバ 「ちゃんと、手を合わせて、ほら」

さなぎ 「(さっさと) いただきます」

ヨツバ 「てい！（手をはたく）」

さなぎ 「何、いちいちいちいち。言ったでしょ、いただきますって」

ヨツバ 「そんなてきとーないいただきます、産まれて初めてよ、お母さん」

さなぎ 「初めまして」

ヨツバ 「手を合わせて、心から感謝の気持ちを」

さなぎ 「何に感謝？」

ヨツバ 「食べ物によ。他に誰にするのよ」

さなぎ 「ママ、食べないの？じゃ、もーらい。」

ヨツバ 「私たちは、私達以外のイノチを食べて生きてるの。聞ってる？」

さなぎ 「何度も聞いているよ、耳にタコが出来るよ！」

ヨツバ 「そのタコだってさなぎは食べるでしょ」

さなぎ 「うまい！」

お皿をとりあげる

さなぎ 「何すんだよ」

ヨツバ 「ちゃんと手を合わせなさい！」

さなぎ 「どうせ向こうに行ったら嫌でも大人しくなるんだ。どうして今夜ぐらい自由なナポレオンでいさせてくれないんだ！」

立ち上がったさなぎ、テーブルクロスを剥がそうとする

世界がストップモーション。  
止まった世界の中で、一人だけ動いている

みぞれ「(独白) ま、私の弟はこんなやつです。威勢がいいんですよ、お母さんの前だけですけど。これ外だと借りてきたチンパンジーみたいに大人しいです。すから。なんていうかまだ謎が多い弟です。実は弟になりたてですから。大人の事情でこちらは姉弟になったんです。だからこれから弟の観察日記をつけて、色々知ろうと思います」

さなぎ「(独白) 明日には知らない町に引越す。だからってどうする事も出来ない。子供は無力だ。親の都合で僕らの人生は決まる。僕は何にも知らないって顔している。何言ったって大人は動かない。だから何にも知らないフリをした方が楽なのさ。けど、ホントは無知じゃない。大人のやってること、じーつと見てるんだ。今できることは作り笑いの練習ぐらい。明日にはこの町を出て行く。この声も届かない遠い遠いところへ」

音楽♪ M1

僕は知っている

世界がどんなに勝手につまらないものかを

大人たちは僕が何もできやしないとってる

ねーえ、マーマ

ばかにしないで

愛想笑いだってできる

せめて並べて テーブルに僕の好きなものだけ

「いただきますは手を合わせて」とママは僕を叱る

明日は知らないどこかの町、ゆううつな僕乗せて。

いつだってフルコース。決まった未来に僕は戸惑う

ねえ、大人ーに、自由を縛る権利はあるの？ だから

宣戦布告ーだ。いただきますと、僕は言うもんか！

歌終わる。

みぞれ「(独白) 昼と夜の間、夕暮れの時刻。西の空が複雑な色をし始めたその時刻に、弟たちはやってきた。遠くから聞こえるクラクション。そうして、この村の田畑を切り裂く一本道を、うねうねと蛇のようにうねりながら、そのバスはやってきた。」

フアフアー、とバスのクラクション

ブロロロ。遠くへ消えていく。

トランクやその他大荷物を持つ母(ヨツバ)ときなぎ。

## 【2 田舎町ー】

ヨツバ「みぞれちやーん」

みぞれ「わー、お母さーん！」

二人抱き合って大はしゃぎ。父は、母たちの荷物を持つ。

みぞれ「さなぎ、久しぶり！」

さなぎ「(はにかんだように) お、お久しぶりす」

みぞれ「あれ？前に逢った時より、背ー伸びた？」

さなぎ「あ、えっと、そうかな」

みぞれ「いや、伸びたでしょ。絶対伸びた。伸び伸びたー？あはは」

さなぎ「(独白) 僕の背は伸びていない。世界と同じだけ伸び悩んでるのだ。」

※独白の間に歩き出している四人。

みぞれ「(独白) 母と弟と再会するのは、2週間ぶりだった。母は、ごたごたとした仕事をドサドサっと一段落させて、この町に引っ越してきた。相変わらず弟の笑顔はぎこちなかった。」

みぞれ「あ、ほら、さなぎ、見える、あの水車の向こう。あそこがうちだよ」  
タモツ「こっちはホント何もなくて寂しい感じするだろう」

ヨツバ「さなぎに) 何も無いでしょって」

さなぎ「うん、ないね。」

みぞれ「そう、ないの。恐れ入った？ここはね圧倒的に何も無いから。そこん  
とこよろしく」

ヨツバ「でも、夕焼け空が綺麗。この世のどこにも属さないようなオレンジ色。  
まるでダブリンの夜」

みぞれ「そのオレンジの夕焼けが終わると、もっと綺麗よ。月明かりで、夜空  
の宝石がきらめき始めるから。きつとね、ママ、夜空の宝石を狙う宝石泥棒が、  
世界中の夜空から盗んだ宝石を、このあたり夜空に隠してるからだと思うの」

ヨツバ「みぞれは詩人だね」

みぞれ「弟は偉人なの？イジらないでほしいのかな」

ヨツバ「恥ずかしがり屋だけよ」

みぞれ「お手」

タモツ「イヌじゃないんだから。」

みぞれ「けど借りてきたネコかもしれないよ。よしよしネコじゃらしー」

さなぎ「(独白) 僕はバカにされてるんだろうか。」

みぞれ「はー、嬉しいなー。ついに弟できちやった。へへ。私ね、実を言うと、  
ずっとお姉ちゃんになりたかったんだ。さなぎ。あんたいいのよ、お姉ちゃん  
って呼んで。それがあんたの特権。これからは世界中であんただけが私をお姉  
ちゃんって呼べるんだから。」

さなぎ「・・・はあ」

みぞれ「これからは困ったら、何でもお姉ちゃんに頼りな。もう一人じゃない  
んだよ。頼りたまえ。お姉ちゃんに全力で頼りたまえ。そしたら私、あんたを  
全力で守ったげる。イヌに噛まれたら全力で慰めたげる。その代わり私の言う  
事何でも聞くのよ。それが姉弟でしょ、ね。わかった？返事は？」

さなぎ「はい」

みぞれ「はい、わかりました、お姉ちゃん。リピートアフタミー」

さなぎ「はい、わかりましたー」

みぞれ「ビューティフォーな」

さなぎ「(声が小さくなる)」

みぞれ「お姉ちゃん」

さなぎ「(小さい声)」

みぞれ「どうしたの、トイレ行きたいの？」

タモツ「トイレはあっちにあるぞ」

クビを横にふるさなぎ

みぞれ「ビューティフォーなお姉ちゃん、トイレに連れてってください。はい、リピートアフタミー」

さなぎ「(小さな声で)ビューティフォーなお姉ちゃんー」

みぞれ「もつと大きな声で。ビューティフォーでカインドなおねえちやわん」  
タモツ「もういいよ」

さなぎ「ビューティフォーでカインドなおねえちやわん」

みぞれ「ビューティフォーでカインドで八頭身のモデル体型なお姉ちゃん、はい、リピートアフター」

タモツ「(制して)もういいって、早くトイレ連れてってあげろよ。」

さなぎ「あ、トイレは大丈夫です。ほんと」

みぞれ「あ、そうだ。トイレついでにいいとこ連れてったげる。さなぎ、ペック好き？」

さなぎ「え・・・」

みぞれ「スキかクライかって聞いてんの？」

さなぎ「・・・クライじゃないけど」

みぞれ「じゃスキって事ね。」

さなぎ「え、スキっていうか」

みぞれ「スキっていうかものすごいスキ！？できる弟！おいで。いいもの見せたいから。ほら」

さなぎとみぞれは歩き出す。

※父と母は、クロスに代わり次の場面のセッティング。

さなぎ「(独白)こんな風にして始まった新しい生活。あの、僕はまだどうやってたってぎこないんですけど、家族ってのはこんな風に突然できたりするものなんですかね？突然夕立になったり、突然停電になる経験があります。だけど、ある日突然、新しい家族が出来るってのは経験なくて。だから僕は今、夏の夕立のように出来た突然の家族に戸惑っています。姉はそんな僕の手をひっぱり、家の裏の大きな小屋へと案内しました。」

杭を外す姉。横にドアを引く動き。



ガラガラガラ (S E)

【第3場 牛小屋】

小屋の中に光が差し込む

みぞれ「入って」

さなぎ、恐る恐る暗がりの中へ。

みぞれ「ほら、ちんたら歩かない。」

さなぎ「(何かに当たって) わ、なんかぬるつとした!」

みぞれ「暗がりではんやりしていると色んなもの踏むよ。」

さなぎ「え、何ここ、トイレじゃないよね。」

みぞれ「迷い込んだ迷宮。ふふ。暗がりの中じゃあね、目より鼻を研ぎすますの。ニオイで場所を嗅ぎ分けるの。どんなニオイがする?」

さなぎ「何だろう、このニオイ。」

みぞれ「わからない?」

さなぎ「嗅いだ事のないニオイ・・・」

みぞれ「弟にとって初めて嗅ぐ土のニオイ。乾いた干し草のニオイ。風のニオイ。古い木材のニオイそれから生き物のニオイ。」

さなぎ、ふと振り返る。みぞれを見失う

さなぎ「あれ?ちよつと何処行ったの?え、ねえ!」

みぞれの声「こっちこっち」

さなぎ「ちよ、ちよつと何処!わ、また何か踏んだ!なんだあ」

ワラがぐわんと動く

さなぎ「え」

ワラ、またぐわんと動く。

さなぎ「何かいる・・・」

小さいシツポらしきものが、ぴよこぴよここと動く。

さなぎ、何だろうと近づく。

と、突然もわつとワラが盛り上がり、

かと思うと、そこから巨大な生き物が姿を現す

さなぎ「あっ・・・あ・・・あああああああああ!」

その場から走り去るさなぎ。グルッと一周して、母のもとへ。

【第4場 家】

さなぎ 「で、でででで出た」

ヨツバ 「あら、出たの、よかったね。ちゃんと手―洗った？」

さなぎ 「違う、出たんだ！」

ヨツバ 「だから出したなら、手を洗いなさいよ」

さなぎ 「手を洗ってどうすんの！」

ヨツバ 「足洗ってどうすんのよ」

さなぎ 「手も足も洗わないよ。手も足も出ないんだから」

ヨツバ 「何の話？顔洗ったら？」

さなぎ 「出たんだよ、化けものが」

ヨツバ 「化け物？」

さなぎ 「ツノが生えてて。鼻に輪っかがあって」

ヨツバ 「え？何の事？」

さなぎ 「ワラの中から、ぬーっと」

みぞれ 「(背後から襲う) ぬうううう！」

さなぎ 「わあああ」

みぞれ 「あはは。驚いた。あはは」

みぞれに笑われ、照れ隠しをするさなぎ

みぞれ 「ウシだよ」

さなぎ 「え？」

みぞれ 「さっきの。もしかしてウシ見た事ないの？」

さなぎ 「あ、あるよ」

みぞれ 「都会っ子は、見栄っ張りってホントだ」

さなぎ 「あるってば！」

さなぎはその場から逃げる。

みぞれ (独白) 弟が見た事あると言ったウシは、動物図鑑で見たそれでした。見た事がない存在するのはみんな色んな妄想を膨らませるのよね。次の日、学校で話す女の子たちもそれと同じ。転校生が来ると言う噂は、生徒たちの間にすでに広まっていて、廊下や女子トイレ、踊り場と言った場所では、復活祭のような騒ぎになっていました。」

カラーン、カラーン (SE)

集まって来る生徒達。何かそわそわしている。

【第5場 学校】

ヤマビコ「ねえねえ、聞いた？」

ソバツカス「聞いた、転校生でしょ。」

ヤマビコ「うちらと同じ学年だった？」

ソバツカス「そう、しかも男子」

ヤマビコ・ソバツカス「ワクワクするよね」

カカシ「お、何、俺の噂？」

ヤマビコ「どんな子なんだろう、都会から来るんでしょう」

カカシ「あれ、もしかして転校生の話？」

ソバツカス「見たよ、私」

ヤマビコ「え、見たの!？」

カカシ「俺も見た」

ヤマビコ「(ソバツカスに) え、どこで見たの？」

カカシ「教えて欲しい?どうしようかなあ」

ソバツカス「校長室。その子の親さんも担任も一緒にいた」

カカシ「いたいた。うちの担任めかしこんじゃってこんな厚化粧で」

ヤマビコ「その子、どんな顔だった？」

ソバツカス「すごいハンサム。」

ヤマビコ「ほんと!？」

カカシ「いや、照れるなあ。」

ソバツカス「ありや将来が期待できるタマだね」

カカシ「ま、俺ほどじゃねえけどな」

ヤマビコ「どのクラスに来るんだろう」

カカシ「こほん。ではここで問題です。さて、転校生は一体どのクラスにー」

ソバツカス「うちのクラスだったさ」

ヤマビコ「ほんと、こりや大変!？」

カカシ「無視すんなよお。俺を会話の輪に入れろよお」

ヤマビコ「どいて。おめかししなきゃ」

カラーンカラーンカラーン。ベルが鳴る

ヤマビコ・ソバツカス「あ！」

ヤマビコ「やばい、おめかし間に合わない」

ソバツカス「大丈夫、おめかししなくても十分かわいい。何の問題もないよ」

ヤマビコ「ほんと？」

ソバツカス「私が嘘付いた事ある？」

ヤマビコ「髪型変じゃない？」

ソバツカス「変じゃない」

ヤマビコ「この格好、変じゃない？」

ソバツカス「変じゃない。おもいっきしかわいいよ」

ヤマビコ「わかった。信じる」

ヤマビコ、席にダッシュで戻る。

カカシ「あああ、なんか俺も急におめかししなきゃいけない気分になってきたあああ！」

ソバツカス「あんた、何処、おめかしする必要あんどのよ」

カカシ「田舎もんだって舐められたらどうすんだよ。」

ソバツカス「舐めたくないわよ、あんたの顔なんか」

カカシ「髪型、変じゃない？」

ソバツカス「変。かなり変」

カカシ「鼻毛出てない？」

ソバツカス「出てる。おもつきし出てる」

カカシ「喧嘩売ってんのか！」

ソバツカス「し！」

動きを止めるカカシ

近づく足音がする。

ソバツカス「来るよ、くるくる」

ヤマビコ「ホントだ。くるくるくるくる」

カカシ「くるくるパーだよ、お前らは」

カカシ、何かの仕掛けを準備する

ソバツカス「ちよっと、あんた何やってんの！」

ヤマビコ「何やってんの!？」

カカシ「試してやるのさ、都会のやつがどれだけのもんか」

ソバツカス「止めてよ、子供騙しの罠にひっかかるわけないでしょ」

ヤマビコ「ないでしょ!」

カカシ「見せてもらうよ、そいつがどれほどのタマか。俺の罠は簡単に破れねえぞ」

足音がさらに大きくなる

ソバツカス「もう来るって!」

ヤマビコ「来るってば!」

カカシ「賭けをしようぜ。もしそいつが俺の罠にひっかからなかったら、俺の言う事を何でも」

ガラ!隣のドアを開き、カカシ、ドアに顔を挟む。

おまけに落下した黒板消しで自爆するカカシ。

カカシ「ぶは、ぶほっ!ぶほっ!」

こまむすび先生「ちよっと何やってんの!騒がしい。席につきなさい」

ヤマビコ「きりーっ。れい。(やたら転校生を意識しながらのお辞儀)着席」

学校の様子。先生らしき人物が立っている。

その隣に緊張した面持ちのさなぎ。

こまむすび「はい、今日は皆さんに新しいお友達を紹介しますねえ。春野さなぎ君です。」

さなぎ「ははるのさなぎです。よろしくおねおねおねおねがおねがががが」

声が震えて、体がどんどん逸れていく。

カカシ「言葉に詰まってんぞ。どっかのネジ外れたんじゃないかあ?」

ソバツカス「わかった、特技がラララララップなのよ、だよね?」

ヤマビコ「だよね?」

さなぎ「だっただよねー。チケケラ」  
ヤマビコ・ソバツカス「かっこいい」  
カカシ「誤摩化すな誤摩化すな」  
こまむすび「さなぎ君は、遠い遠い街から電車で揺られ、一眠りして、目が覚めて、また一眠りしてこの町にやってきてくれました。」  
ソバツカス「遠いってどれくらい？」  
ヤマビコ「どれくらい？」  
さなぎ「ふふ風船を飛ばしても届かないくらい」  
ソバツカス「さなぎくんの街はどんな街？」  
ヤマビコ「どんな街？」  
さなぎ「ねね眠らない街」  
ソバツカス「街が不眠症なんだ？」  
ヤマビコ「なんだ？」  
カカシ「羊を数えりや神様だって眠るぜ」  
さなぎ「ひ、羊なんていません！」  
ソバツカス「じゃ何があるの？」  
ヤマビコ「あるの？」  
こまむすび「代わりに長方形のお城が沢山沢山立ち並んでいます」  
ソバツカス「そのお城は積み木で出来てるのかしら？」  
ヤマビコ「かしら？」  
さなぎ「主にコンクリート」  
カカシ「コンクリのお城なんて聞いた事ねえぞ」  
こまむすび「はいはい、そんなに質問攻めしないの。取り調べじゃないんだから。とりあえず席について。空いてる席はー。」  
ソバツカス「空いてます！」  
ヤマビコ「空いてます！」  
カカシ「空いてません！」  
こまむすび「空いてるでしょ、君のチャックは」  
カカシ「何言ってるんだ、先生。今日は空いて（ズボンを見て）空いてた！（慌ててチャックをあげる）」

笑う先生とヤマビコとソバツカス、カカシ慌てる。

さなぎ「(独白) 決められた席。僕はそこに座る。随分と古い椅子は、僕がもたれかかると、ギイギイと嫌な音を立てた。ギイギイと嫌な音。外れかかったネジ。足の長さが違う机。だから僕の鉛筆は、バランスを失い、コロコロと机の上を転がり、重力に従ってやがて床に落ちていきました。ここではできるだけバランスを保とう。ボクの心が密かにそう呟いた。」

さなぎの独白の間に、家の配置へ。  
照明も変わっている。

## 【第6場 家】

ヨツバ「おかえり。ど、どうだった？」

さなぎ、上着を脱ごうとする

タモツ「おかえり」

ヨツバ「さなぎ、ただいまは？」

さなぎ「え？」

ヨツバ「ただいま！」

さなぎ「おかえり」

ヨツバ「ちよっとお、挨拶しなさいって。そんなじゃ新しいお友達できないでしょ。ね、パパ」

タモツ「はは。ま、お腹空いたろ。ご飯にしようか」

ヨツバ「自己紹介とかちゃんと出来た？緊張しなかった？」

さなぎ「するわけないよ」

ヨツバ「ホント？ならいいけど。緊張して何もしゃべれないんじゃないかって」

さなぎ「お母さん、ご飯」

タモツ「今、みぞれが作ってるから。みぞれ、もう出来るよな？」

みぞれ「あー、さなぎ帰ってたの。ただいまぐらい言いなさいよ」

ヨツバ「ほらあ、お姉ちゃんにも言われた」

みぞれ「お鍋持ってくよ。大丈夫？」

ヨツバ「お姉ちゃん、毎日料理作ってるんだって。えらいでしょ」

さなぎ「なんでお母さんじゃないの？」

ヨツバ「え、何が？」

みぞれ「はい、どいたどいたどいたどいた」

運んで来るお鍋。湯気が出ている

ヨツバ「わあ、カレー！？すごいねえ」

みぞれ「野菜カレー。このあたりの畑で採れたんだよ、さなぎ。わかる、畑。野菜がね、育つの。すすく育つのよ。」

さなぎ「なんで。ねえ。(母を揺らす)」

みぞれ「何、私の料理じゃ不満？」

タモツ「お姉ちゃん、こう見えて結構器用なのよ」

みぞれ「ピト(とあついのをつける)」

タモツ「あつつう！」

みぞれ「こう見えて、は余計です」

ヨツバ「すごいよ、お姉ちゃん。美味しそう」

タモツ「さなぎ、小皿貸しな」

さなぎ黙って、小皿を渡す。

ヨツバはすでに父のカレーを小皿に盛りつけている。

ヨツバ「(小皿を渡し) はい、パ。パ」

タモツ「ありがとう」

みぞれ「(小皿を渡し) はい、お母さん」

ヨツバ「ありがとう」

タモツ「(小皿を渡し) はい、さなぎ」

さなぎ「(かなり小さな声で) ありがとう」

ヨツバ「もっと大きな声で言いなさいよ。ありがとう！って」

タモツ「いいよ、食べよ食べよ」

ヨツバ「はい、手を合わせて」

3人「いただきます！」

食べ始める

ヨツバ「美味しい！」

みぞれ「ホント!？」

ヨツバ「いつも料理作るの？」

みぞれ「ま、他に誰も作ってくれないし」

ヨツバ「えらいねえ」

タモツ「俺だつてたまに作るだろ」

みぞれ「あんなのは料理の部類に入らないでしょ。名称つけようがないもん。」



なんか、ぐしゃっとしたものの、とか、もさっとしたものの、とか、ぱさぱさとしたものにぼそぼそとしたものをかけたのとか」

ヨツバ「絶対お姉ちゃんの料理いいよ、売れるよ。お店やれる」

タモツ「大袈裟大袈裟」

みぞれ「水がいいからだと思っ」

ヨツバ「そんな謙遜しなくても」

みぞれ「いや、ほんと。この町は何にもない分、水が綺麗なの。山奥から湧き出る綺麗な水で食べ物は何からね。だからその食べ物も美味しくできるの」

タモツ「じゃどうして俺の料理は、名称もつけてくれないんだろう。」

ヨツバ「だからお姉ちゃんの腕だって。(さなぎに) ねえ、さなぎ」

さなぎ「あ・うん」

ヨツバ「あれ？そういや、ちゃんといただきます言った？」

さなぎ「言ったよ」

ヨツバ「ホントに？」

さなぎ「言っただけ。ごちそうさま」

みぞれ「もういいの？美味しくなかった？」

さなぎ「ううん、そんな事ない」

みぞれ「美味しかったら、美味しいいいいいって遠慮なく叫んでいいのよ。」

タモツ「マズかったらマズいいいいいいって遠慮なくゴミ箱に捨てていいんだぞ」

みぞれ「それはそれでぶっとばすけど。」

さなぎ「あはは。大丈夫大丈夫」

タモツ「さなぎは食べ物の中で、何が一番好きなの？」

さなぎ「肉」

タモツ「肉？」

さなぎ「ステーキ」

タモツ「肉かあ。じゃカレーにお肉入れた方がよかったなあ。なあ」

ヨツバ「けど、十分美味しい。ね、さなぎ。ね？」

さなぎ「・うん！美味しいって」

みぞれ「あ、そうだ、さなぎ、朝早く起きられる？」

さなぎ「え。何で？」

みぞれ「明日から一緒にやるよ。」

さなぎ「何を？」

みぞれ「ウシの世話よ。ペット好きなんでしょ。朝六時ね、叩き起こすから」

さなぎ、何も答えず退場。

みぞれにスポット。

みぞれ「(独白)その後、弟が私の料理にケチをつけていた事を私は知っている」

照明チェンジ。

暗がりの中、そろりそろりとやってくるさなぎ

ギョルルルルルルルル

箱(冷蔵庫)の中を開けて何かを探してる動き。

箱の中からの漏れ灯りで、ヨツバの顔が暗闇に浮かぶ

ヨツバ「何やってんの、そんなところで。」

さなぎ、びくつとする

ヨツバ「早く寢床行きなさい」

さなぎ「お腹空いた。」

ヨツバ「夕飯食べたでしょ」

さなぎ「お腹空いた」

ヨツバ「早く寝なさい。お姉ちゃんに言われたでしょ、朝六時起きだって」

さなぎ「なんか作ってよ」

ヨツバ「じゃ何で夕飯ちゃんと食べないの？」

さなぎ「お母さん、作ってよ」

ヨツバ「そんなに食べたきゃ自分で作りなさい。お姉ちゃんだって自分で作ったでしょ」

母、退場。

さなぎのスポット

さなぎ「ここじゃチャンネルを回してもスキな番組がやってない。スキな料理も食べられない・・・」

コロスが巨大な布を持ちながら登場。

さなぎの頭上をふわっと包む布。

さなぎは包まれた巨大な布で、姿が消える。

## 【第7場】

みぞれ「さなぎ、朝よー。起きろー」

布に包まってるさなぎ。

みぞれ「起きろー」

みぞれ、布を剥こうとするが、さなぎ、拒む。

みぞれ「起きなさいってば！」

みぞれが思い切り布を剥がすとさなぎは転がっていく  
ふわりと舞い上がった布は、あっという間に消える

やがて照明が変化し、そこは牛小屋。

### 【第八場 牛小屋】

ドアを開けるみぞれ（マイム）

ガラガラガラ（SE）

そばには眠そうな目をこするさなぎ。

みぞれ「ほら、早く中入りなさいよ、寒いでしょ、中也寒いけど。あのね、けど、こんなんで寒いって言ったら北極とか行けないからね。ペンギン見れないよ。結局、北極はすごいんだからね」

さなぎ（独白）ペンギンがいるのは南極だ。姉は時々、足りない知識をひけらかす。だけどその稚拙な姉の知識をこのくそ寒い早朝に訂正する気力はない。「みぞれ「いい、まずじゃ掃除から。とりあえずこの辺り、バースとやって、で、その後あれをだーつとやって、ここらへんもバーつて感じで。ま、このへんとあのへんチャチャチャつて感じで。わかった？やって。」

さなぎ（独白）わからない。姉の説明は適当すぎる」

みぞれ「とにかくね、ウシつてデリケートな生き物だから。綺麗好きだし。ちやんと世話してあげれば、それに答えてくれるし。かしこいんだから。ねえ。ウシのすけ、ねえ。」

さなぎ「ウシつて頭いいの？」

みぞれ「頭いいわよ。私らよりずっと頭いいわよ。おしゃべりだつて出来るし。」

さなぎ「ウシとおしゃべり？」

みぞれ「お父さんとよく会話してるもん」

さなぎ「動物としゃべれるのは、ムツゴロウさんの特殊能力だと思ってた・・・」  
みぞれ「私だつて少しぐらいならわかるよ。鳴き声よく聞いているとき、毎回微妙に違つたりするのよ。お腹空いたよお、とか。眠いよお、とかさ。ま、ウシのすけの言葉わかるぐらいになったら、あんた立派な飼育係よ。ほら、さつさと動く！」

さなぎ「わ！」

押された拍子に、何か踏んづけた様子

さなぎ「ああ！」

みぞれ「何いきなり大声出して」

さなぎ「ウンコが！」

みぞれ「ウンコがどうしたのよ」

さなぎ「ウンコが！（ウンコのついた手を見せる）」

みぞれ「あんただってウンコするでしょ！」

さなぎ「ウンコが！」

みぞれ「ウンコウンコうるさいわよ。」

さなぎ「だってウンコが！」

みぞれ「叫んでる暇あったら掃除してよ。ほら、こうやって、ほら！もっとほら宝石を拾い集めるように。」

さなぎ「ウンコは宝石じゃないよ！」

モウウウウ。ウシのすけ、暴れる。

さなぎ「ひい！」

みぞれ「何て声出すのよ、ウシのすけがびっくりするでしょ」

さなぎ「な、鳴いた・・・」

みぞれ「鳴くでしょ、そりゃ。さなぎだって子供の頃、泣いたり、ウンコもらしたりしたでしょ。それをママが拾ってくれたのよ。ママにしてみたら、あんなのウンコは宝石よ。あんたの宝石を集めて、ブルーチップ集めて、山崎パンのシール集めて、そうやって育ててくれたんでしょ」

さなぎ（独白）姉の言葉はどこまでが本当かわからない。」

みぞれ「ま、そういうわけだから、後よろしくね。」

みぞれ、退場しようとする。

さなぎ「え、ちよつと！」

みぞれ「何？」

さなぎ「ぼ、僕一人で世話するんですか？」

みぞれ「そのために段取り教えたでしょ」

さなぎ「え、でも」

みぞれ「あのねえ、お姉ちゃんは忙しいの。知らないの？「お姉ちゃん」って書いて忙しいって読むのよ。だいたいねえ、あんたがここに来るまで、私一人でこの仕事やってたのよ、ずっと。おまけに料理も作って掃除して。ひとつぐらい弟のあんたが負担してくれなかったらバランス取れないでしょ。お姉ちゃんの言う事、間違ってる？間違ってるよ。ね？」

さなぎ「・・・」

みぞれ「うん、聞き分けのいい弟。聞き分けよしおだね。よしお！家族っていいね。ふふ。バイビー」

みぞれ、退場

さなぎ「終わった。僕は終わったんだ。これから僕は毎日馬車馬のように働かされるんだ・・・」

前奏♪

笑えばいいさ、この僕を

不幸で惨めなこの僕を。

牛小屋にいながら、馬車馬さ。

笑えばいいさ、この僕を。

宝石集めるわけじゃない

ウンコ集めるこの僕を。

(おい、何見てんだよ。何か言いたい事があれば言えばいいよ、この野郎)

モリモリ、ウンコをするウシ

人が話しているまにまに、

しゃべったそばから、フン垂らす。

羨ましいよ、その神経。

恥じらいもとうよ、ほ乳類。

蓋でもしようか、詰めようか。お尻の穴にコルク栓。

(人が真剣にしゃべってんのに、クソ垂れてんじやねえよ、クソつたれ！)

ちよっと前まで僕の夢、お空の上のパイロット。

今じゃすっかりその夢は、空の藻くずとなりました。

このまま行けば順調に、畜産業者、まっしぐら。

フンをとる♪

干し草を取り替える♪

エサをあげる♪

(あああ、やっとな綺麗になったああ)

ウシはまたモソモソとフンをする。

歴史は繰り返す。

掃除しては

フン！(ウシがフンをする)

綺麗にしては

フン！(ウシがフンをする)

それでもウシはフンをする

盛りだくさん。てんこ盛り。

それでも地球は廻ってる。

日は沈む。気も沈む。

それでもシツポはハエはたく。

(間奏)

さなぎ「次の日もまた次の日も、僕はそのウシの面倒を見る係だった。そんな係にしてくれと、頼んだ覚え一度もないのに。」

音楽は下がっていく。

みぞれ「それから一週間後、弟の学年で一枚の紙が一斉に配られた。ホームルームで配られたお知らせは、親さんが学校に来るといふ授業参観のお知らせだった。」

カラインカライン。

どやどやと人が入って来る。

### 【第九場 学校】

ヤマビコ「来る？」

ソバツカス「うちは絶対来る。え、来る？」

ヤマビコ「いやあ、うちは来ないかな」

ソバツカス「え、なんでなんでどうして？」

ヤマビコ「うちのパパ、今、海外に行ってるから」

ソバツカス「わーいいいなー。え、ヤマビコのおじさん、何のお仕事してる人だっけ」

ヤマビコ「橋を作るお仕事。」

ソバツカス「ロマンチックうう。」

ヤマビコ「世界中、色々な場所に橋をかけるにいくのよ」

カカシ「なるほど、そうやって君のパパは、君のママに心の橋もかけ、そうして、君が産まれたんだね。うーん、ロマンチック」

ソバツカス「何言ってるの、あんた。(ビンタ)」

カカシ「いたーい！」

ソバツカス「ふざけた事言ってるよ、ぶつよ」

カカシ「もうぶつてんじやねえか！ちきしよー、親にもぶたれた事ないのに」  
ソバツカス「何言ってるのよ。生まれつきぶたれたような顔してるくせに」

ゾンビのように追いかけるカカシ。

逃げるソバツカス

そんな騒がしい中に登場するさなぎ。

ヤマビコ「あ、さなぎ君だ」

ソバツカス「ねえねえ、さなぎ君のところのパパは来るの？」

さなぎ「な、何の事？」

ソバツカス「ほら、父兄参観よ」

さなぎ「あ、えーっと、まあ」

ソバツカス「どんなパパ？」

さなぎ「ま、えと、どんなと言われるとー」

ヤマビコ「絶対かっこいいよねえ、さなぎ君のお父さん。」

ソバツカス「かっこいいかっこいい」

カカシ「見てないのになんでわかんだよ、ゴリラかもしれないぞ」

ソバツカス「ゴリラはあんたのこの親父でしょ。一緒にしないでしょ。」

カカシ「なんでうちの親父ゴリラだってわかるんだよ。」

ソバツカス「DNA甘く見ないでしょ。あんたみたいなの産み落としたのは、

100%ゴリラよ。ねえ」

さなぎ「・・・あ、え、はは。」

ソバツカス「ね、さなぎくんのお父さん、何のお仕事してるの？」

ヤマビコ「何してるの？」

さなぎ「いや、まあ、自慢出来るほどのあれじゃ・・・」

ソバツカス「パパのお仕事、嫌？」

ヤマビコ「パパイヤ？」

さなぎ「パパ・・・」

ソバツカス「パパイヤ？」

さなぎ「パパパイロット」

ヤマビコ・ソバツカス「ぱいろつと！？」

ソバツカス「すごいねえ。やっぱりカッコいいねえ。」

ヤマビコ「じゃ空飛んでるの？」

さなぎ「飛ぶ、飛ぶ。パパにお願いすれば、遠い国でもひとつ飛びさ」

ヤマビコ、ソバツカス「すごい」

カカシ「言つとくが、俺の親父だって世界を股にかけてた営業マンだぜ」

ソバツカス「世界股にかけて、女も二股かけて、奥さんに愛想つかされたんでしょ」

カカシ「おい、どっからそんな噂のようで本当の話を」

ヤマビコ「そ、そのパイロットパパは、参観日に来るの？」

さなぎ「ま、まあ雲の上の生活の方が居心地いいってパパだからなあ」

ヤマビコ、ソバツカス「えー」



カラーンカラーン

生徒たちと先生は散る。(照明ゆっくりスポット)

その紙を持ち続けていたさなぎ、ただ一人。

その紙をくしゃくしゃにする

声(ヨツバ)「え!?!」

の一言でパッと照明が明るくなる。そこは、

### 【第10場 家】

家の配置。ヨツバとさなぎの二人

ヨツバ「・・・お父さんの仕事？」

さなぎ「うん」

ヨツバ「何で帰ってくるなりそんな質問を」

さなぎ「いや、まあ、単純にどんなお仕事してるのかなと思って」

姉、遠くでソバ耳を立てている。

ヨツバ「何で急にそんな事聞くの？」

さなぎ「いや、まあ、なんとなく」

ヨツバ「工場の従業員よ。」

さなぎ「工場?どんな？」

ヨツバ「食品を加工するところよ」

さなぎ「どんな事してるの？」

ヨツバ「私に聞くより、パパに直接聞けばいいじゃない。でしょ？」

さなぎ、急に黙る。

ヨツバ「なんで黙るの。どうしてパパには聞けないの?こら、ちよっと!」

さなぎ、廊下へ出ていく。(母の方の照明が消える。退場)

廊下で待ち伏せしていたみぞれ。

さなぎが右へ行こうとすれば右へ。左へ行こうとすれば左へ。

さなぎ「・・・な、何っすか」

みぞれ「困ってるんじゃない?お姉ちゃんに相談する事ない?」

さなぎ「え」

みぞれ「困ったらお姉ちゃんを頼りなさいって言ったでしょ。パパがどんなお仕事してるか知りたいんじゃないの?」

さなぎ 「ぬ、盗み聞きしたんですか。」

みぞれ 「頼りにされるための努力よ。知りたい？パパのお仕事」

さなぎ 「教えてくれるの？」

みぞれ 「どうか教えてください、綺麗でクールビューティーなオネエさま」

さなぎ 「結構です」

さなぎ、去ろうと擦る

みぞれ 「屠殺場よ！」

さなぎ 「(ぴたりと足を止め振り返る)とさつば？」

みぞれ 「お、わかりやすく食いついたね。わかる、屠殺場？」

さなぎ 「え、あ、うん、まあ聞いた事あるような」

みぞれ 「知らないなら知らないっていいな。後で損するよ」

さなぎ 「知らないっていやあ、知らない」

みぞれ 「さなぎ、お肉屋でお肉買った事あるでしょ？」

さなぎ 「ええ、まあ」

みぞれ 「お肉屋で並んでいるお肉は、どうなってる？」

さなぎ 「どうなってる？って」

みぞれ 「加工されてスライスされた状態でしょ」

さなぎ 「そりやそうでしょ」

みぞれ 「そりやそうでしょって思うのは、その前にお肉を加工する工場があるからでしょ、それが屠殺場ってとこよ」

さなぎ 「え！？」

みぞれ 「そんな大きな声出さなくても」

さなぎ 「お肉を加工する工場・・・」

みぞれ 「今言った事復唱しないで」

さなぎ 「てことは、屠殺場ってのは、生き物を、殺す場所なの・・・」

みぞれ 「ま、言い方は悪いけど。」

さなぎ 「てことは、お父さんは、お父さんは・・・」

さなぎの中に膨らむタモツの妄想。

カーテンの向こう。

ゆっくりとパパのシルエットが大きくなる。

巨大な包丁を振りかざし、生き物を殺すシルエット

タモツ「ただいま！」

いきなり登場するタモツ

さなぎ「わ！わ！わ！わ！」

タモツ「な、なんだ、どうした、そんな驚いて。大丈夫か？」

さなぎ「だ、大丈夫。何でもない。何でもない、何でもないよ。」

タモツ「ほんとかあ？何か隠し事してるとか」

さなぎ「してない、してない。ほんとしてないって」

タモツ「はーくしょい！」

さなぎ「(異常に驚き逃げて) ひいひい、殺さないで。殺さないで。いや、殺さないで！」

みぞれ「くしゃみで人は殺せないでしょ」

タモツ「ごめんごめん、驚かせて。うう、寒い。先にお風呂、入ろかな」

タモツ、上着を脱ぎ、近くに置き、退場。

さなぎ、その上着を見る。

ゆっくりとかかり出す音楽。

♪

毎日毎日、僕のお父さんは

生きている動物を 殺しているのさ

授業参観で、声を高らかに、

そんなこと発表できるのか？

僕の父さんの工場じゃ、色んな動物死んでいく。

一体全体、父さんは、どんな顔して裁いているんだろう。

皆の前でそう発表したら、僕は言われるよ。

【殺し屋の息子！】

一番誰がさばかれるべきですか？

動物ですか？父ですか？

タモツ「あ、そういや、授業参観あるんだろ」

さなぎ 「え、なんで？ ないよ！ ないない！ 授業参観なんて。」  
タモツ 「けどオネエちゃんから聞いたよ」  
さなぎ 「なんてこった！」  
タモツ 「その授業参観って父さん、行ってもいいのかな。」  
さなぎ 「あ、いや、それはねえ」  
ヨツバ 「行ってあげて。是非」  
タモツ 「明日、工場長に聞いてみるよ。仕事休めるかどうか」  
さなぎ 「あー、いいよいいよ、無理しないで」  
タモツ 「無理ぐらいさせてくれよお。せつかくの機会なんだから」  
さなぎ 「来ないでいいってば！」

間。

タモツ 「……」  
さなぎ 「あ・・ホントに來ないで大丈夫だから」  
ヨツバ 「何でそんな事言うの？」  
さなぎ 「……」  
みぞれ 「お父さんが屠殺場で働いてるって言ったから？」  
ヨツバ・タモツ 「!？」  
みぞれ 「そうなの？」  
さなぎ 「ち、違うよ」  
みぞれ 「お父さんの仕事知りたかったのは、授業参観の作文のテーマだったからでしょ？」  
さなぎ 「だから違うってば！」  
みぞれ 「嘘つかなくていいよ。友達の妹、あんたと同じ学年だし。」  
さなぎ 「……」  
みぞれ 「お父さんに謝ってよ、ちゃんと」  
さなぎ 「(適当に)『めんなさい』」  
みぞれ 「何なのよ、それ！」  
さなぎ 「謝って言ったくせに！」  
みぞれ 「そんな誤った謝りで、誰が謝れって言ったの！ ちゃんと謝りなさい！」  
さなぎ 「もういいよ」

みぞれ「待ちなさい！」

さなぎ「離してよ」

みぞれ「何でオネエちゃんの言う事聞けないの」

さなぎ「何がオネエちゃんだよ。勝手にオネエちゃんヅラしていい気になってんじゃねえよ！」

みぞれの手を振り払うさなぎ、退場。

ヨツバ「さなぎ！」

ヨツバとタモツ、追って退場。

照明カットチェンジ。

### 【第十一場】

さなぎ、走る走る走る走る。やがて立ち止まる。

※照明、不気味な雰囲気。

さなぎ「はあ、はあ、はあ、はあ・・見事に迷子だ・・どうしよう」

ホーホーと鳴くフクロウ。

狼のような犬のような鳴き声。

ぶるっど震え上がる。

かと思うと、カサカサと茂みの揺れる音

さなぎ「ひいー！」

バサバサ

さなぎ「ひい、鳥！」

ブーン

さなぎ「ひい、虫！」

プー。

さなぎ「ひい、オナラ！」

逃げ去る。退場。

と同時に、父、母、姉、別の場所から素早く登場。

### 【第十二場】

照明も切り替る。(元の場所のようだ)

タモツ「ちよっと探してくる」

ヨツバ「私も行きます」

みぞれ「いいよ、ほっとけば」

タモツ「そういうわけにいかんだろ。お風呂、蓋しておいて」

タモツ、母、退場。

照明、みぞれのスポットへ

みぞれ「(独白)一人とも弟を甘やかせ過ぎだ。ちなみに父と母が外へ探しに出かけた頃、実は弟は家の裏口まで戻ってきていた。だからと言って家に入る事もできず、しかたなく牛小屋の中に隠れる事にしたようだ。」

照明スポット解除で別の照明

### 【第13場 牛小屋】

ガラガラガラ。(SE)

外部から漏れる光の中に、さなぎのシルエット

さなぎは、恐る恐る牛小屋に足を踏み入れる。

さなぎ「お、おい。う、うし。起きてるか。おい」

ウシがヌツと顔を出す。

さなぎ「ちょ、ちょっとワラ借りるぞ。今日は、なんていうか、牛小屋で寝たい気分なんだよ。(ワラを体に被る)な、何だよ。おい、でっかい顔近づけんな。あっち行けよ！ほら！し！し！」

ウシは、ただ黙ってつぶらな瞳でさなぎを見つめている。

さなぎ「何なんだよ、その目は。お前なんか怖くないからな。あっち行けつてば。別に邪魔してないだろ。お前までどっか行かせたいのかよ。わがままで手間のかかるガキだつて。どいつもこいつもさ。表面上はニコニコして。子供だと思つてバカにすんなよ、僕は一人で何でも出来るんだよ！すごいんだぞ、僕は！将来すごいぞ！勉強だつてトップだったんだ・僕はすごいんだよ、一人でなんだつて……」

ふさぎ込んでいるさなぎの声が、だんだん震え始める。

見つめていたウシ、さなぎにゆっくり近づき、座り込む。

さなぎ「……」

ウシ、ぺろりとさなぎを舐める。

一瞬驚くさなぎ。だが側にいてくれるウシの体温を感じる。  
 さなぎを慰めているように見える。  
 さなぎもウシの体に身を寄せる。  
 堪えていた涙をだんだん抑えきれなくなり、  
 ウシに抱きつき、ワーワーと大声で泣き出す。

【第14場 外】

照明切り替り。舞台の外枠へ。  
 そこに走ってくる懐中電灯持参の男女（父と母）  
 あちこちを探してゐる様子。

タモツ 「どう？いた！？」

ヨツバ 「(クビを横に振る)」

タモツ 「まいったな。何処行つたんだ？」

みぞれ 「お父さん、お母さん！」

みぞれが登場

ヨツバ 「何そんな格好で。風邪ひくから家ん中戻つてなさい。」

タモツ 「海岸の方かもしれない」

ヨツバ 「海岸？いくら何でもあんな遠くまで」

タモツ 「可能性がないわけじゃない。ちよつと見て来る」

みぞれ 「いいよ、ほつとけば。海岸の方じゃないから」

タモツ 「何でそんな事、みぞれにわかるんだ」

みぞれ 「わかるよ、だつてほら！」

父と母、みぞれの指差す方向を見つめる。

みぞれ 「牛小屋ん中」

3人、ゆっくりと牛小屋の方へ。

やがて覗き込む。

ゆっくりと照明に照らし出されるさなぎ

その隣で寝ているウシのすけ

【第15場 牛小屋】

タモツ 「・・・寝てる・・・」

ヨツバ 「何、ウシのすけといつのまに仲良しになったの？」

みぞれ「だから言ったでしょ。ほっときやいいって」

タモツ「お姉ちゃん」

みぞれ「なに」

タモツ「毛布持ってきてあげて」

みぞれ「・・・もううう、今回特別だからね」

姉、退場。

タモツ「・・・色々考えてしまうよ」

ヨツバ、タモツを見る

タモツ「前から思ってたんだ。仕事、変えようかどうか」

ヨツバ「何でそんな事」

タモツ「いやホントに前から思ってたんだ。いつかさなぎが知ったら嫌な思いするだろうと思ってたし」

ヨツバ「そんな事ない」

タモツ「そんな事あるよ、そんな事あるんだよ、絶対」

ヨツバ「・・・」

タモツ「小学校の時、クラスで仲のいい友達がいてき、けどそいつある日突然虐められてさ。何が原因だと思う？・・・そいつの親父、バキュームカーの運転手だったんだ。」

ヨツバ「そんな事で」

タモツ「そんな事だよ。子供が子供を虐める理由なんてそんなもんだよ。」

ヨツバ「・・・」

タモツ「そいつ、みんなに鼻を摘まれてさ。お前の親父はウンコの運び屋だ、くせーくせー、って。親友がそんな風に言われて、悔しくて、ほんと悔しくて。僕は、僕は大声で言ったんだ。やーい、お前の父ちゃん、ウンコ屋さんーやーい。って」

ヨツバ「あ、そつちに加担したんだ・・・」

タモツ「今でも時々そいつの事、思い出すよ。きっと恨んでいたんだろうなあって。俺の事も、親父の事も」

ヨツバ「立派な仕事よ」

タモツ「もちろん。今ならそう思うよ。けどさなぎぐらいの年頃じゃ」



ヨツバ 「さなぎのために仕事変えるの？」

タモツ 「こういう古い町っていうのは、人の噂をとかく気にするからね」

ヨツバ 「屠殺場は隣の町でしょ。この町の人たちにもどんな工場か知られてないって言ってたじゃない」

タモツ 「けど、まあ何と言うか、いつかは漏れるもんだと思うし。それにー」

ヨツバ 「二回目」

タモツ 「え」

ヨツバ 「結婚前に同じ事言った。」

タモツ 「え」

ヨツバ 「今度その台詞言ったら」

タモツ 「・・・」

ヨツバ 「目ん玉くりぬくよ。」

タモツ 「怖い・・・」

ヨツバ 「貴方がどんな仕事してようが関係ない。屠殺場の工場員でも、バキュームカーの運転手でも、バキュームカーのこべりついた汚れを落とす清掃員でも、私の中じゃ、それ全部込みだから。全部セット。全部セット価格。」

タモツ 「お試しセットみたいなもんだ、僕」

ヨツバ 「そう、お試しセット、一生分の。それにすぐに他の就職先見つかるもんじゃないでしょ？」

タモツ 「ま、ごもつともなんだけど」

ヨツバ 「さなぎもいずれわかってくれる時が来ると思う」

タモツ 「・・・」

照明、みぞれのスポットへ。

みぞれ 「屠殺の歴史は根が深い。と、歴史の授業で習った。私はその授業を真剣に受けていた。というの嘘でヨダレを垂らして居眠りをしていただけだ、だけでもぼんやり覚えている。まどろみの中で聴いたこの土地の歴史をー」

遠い遠い昔♪

位の高いお役人

低位の者に 汚い仕事

無理やり押し付けた  
屠殺の仕事も  
その一つ

振り下ろす斧に  
流れるは赤い血  
私のご先祖様  
が任された仕事

それは今も

私の体巡る  
血――中――に

みぞれ「(独白) 次の朝。牛小屋を覗くと、弟はウシのすけと寄り添いながらワラの中に眠っていました。最高にくたらしくて、最高にかわいい寝顔でした。」

さなぎ「(目を閉じたまま) ウシのすけの胸に耳を当てると、聞こえて来るリズム。とくん、とくん、とくん、とくん。それはウシのすけの心臓の鼓動。羊を数える事の出来ない僕が聞いた、ただひとつの子守唄」

日の光が差し込み、ゆっくりと目を開けるさなぎ。

朝の始まり。朝の鳥が鳴いている。

さなぎ「(ウシを見て)・・・ずっとそばにいてくれたんだね」

さなぎ、ウシにまた寄り添う。

さなぎ「(ウシの胸に耳をあて) とくん、とくん。(その体勢のままニオイを嗅ぐ) くさい。・・・くさいけど、あったかい (微笑むさなぎ)」

照明、切り替る。

【第16場 食卓から道中】

みぞれ「(独白) やがて朝食の時間になると、家中いっぱい広がるパンの焼けたニオイ。そのパンのニオイに釣られて、お腹を空かしたさなぎが、玄関から

そつと戻ってくる。私は気づかないフリをし、ママは何食わぬ顔で、バターを塗って差し出すと、何も言わず、部屋の隅でそのパンを齧り、弟は学校へと向かった。」

歩くさなぎ。ふと足を止め、戻る。

ウシの近くまで行くと、ウシはむくつと起き上がり、

さなぎに近づいて来る

さなぎ「・・・おはよ」

カランと鈴の音で返事をするウシ

さなぎ「・・・ウシのすけ」

またカランカランと鈴で返事をするウシ

さなぎ「・・・ウシのすけ！」

さらにカランカランと鈴で返事をするウシ

さなぎ「ふふ」

みぞれ「弟よ、初めて名前呼んだね？」

さなぎ「え！？（振り返る）」

みぞれ「ウシのすけって」

さなぎ「・・・い、行ってきます！」

さなぎ、ダッシュで去る。嬉しそうにしばし見送ってから

みぞれ「お父さん、お母さん、聞いてー」

みぞれ、退場。

♪

さなぎ、歩きながら歌い出す。

名前を呼べば

鳴らす鈴の音

ジッと見つめれば

転がる黒い目

繋がったよね、なんだろう。

言葉じゃないよね、何だろう。

大きな体に包まれて  
夜中に聞いたあのリズム  
耳の隣のあの鼓動  
とくんとかんは、何だろう。  
聞いたリズムは、ゆりかごの  
体に馴染む心地よさ。  
ベッド代わりの干し草の  
こちよさは何だろう。  
いつのまにやら、よど垂らし  
眠っていたのは僕だろう。

登校途中の土の道  
なんだか妙な気持ち良さ  
その日一日、少しだけ  
背伸びしたよな  
いい気分。

(間奏)

起きて来るパパ。

【第17場 挿入】

みぞれ「ねえ、聞いて聞いて。弟が進化した。」  
タモツ「こらこらズボンが下がる下がる。何が進化したんだ」  
みぞれ「弟がウシのすけって名前呼んだ」  
タモツ「進化したってそれが」  
みぞれ「進化だよ、しかもウシのすけ見てニコツと笑ったんだよ。手―振って  
たりなんかして。進化した。進化した！」

照明、また元の場所。さなぎが歩いて来る。

【第18場 学校〜河川敷〜】

チャイムと同時に飛び出す学校。

牛小屋覗けば、鳴らす鈴の音

近くの河原に広がる絨毯。

緑色した広がる絨毯。

名もなき草を食べながら

名前を呼ぶと、鳴らす鈴

口笛吹けば

揺らす黒い尾。

シッポで踊るよ。

ハエ踊る。

闘牛のように黒いウシと踊る♪

どんどんそのリズムは早くなる。

(その数日の間の移り変わりを提示)

よりいっそう楽しそうなさなぎ。

ウシとの踊りも息びったりになっていく。

### 【第19場】

ソバツカス「さなぎくん、前よりいい顔になってきたね。」

ヤマビコ「なってきたなってきた！」

さなぎ「そう？」

カカシ「そうかあ」

ソバツカス「前より、表情が明るくなった」

ヤマビコ「なっとなっとなっ！」

さなぎ「そうかな！（照れる）」

カカシ「まあ、俺ほどじゃないけどなあ！（百万ドルの笑顔）」

ソバツカス「ウシ、スキなの？」

ヤマビコ「スキなの？」

さなぎ「な、何で？そんな事言ったっけ？」

ソバツカス「最近、授業中よくウシの落書き描いてるから」

ヤマビコ「描いてる描いてる！」

カカシ「こらこら覗き見はいかんよ」

ヤマビコ「の、覗き見じゃないよ、ほんと違うから。余計な事言わないでよ（カカシを激しく叩く）」

カカシ「（痛がって）いた！あ、腕が！」

さなぎ「あ、はは、スキってどうか、今ウシの世話しててさ」

二人「え、ホント？」

カカシ「腕が！」

ソバツカス「名前とかあるの？」

ヤマビコ「あるの！？」

カカシ「うでが！」

さなぎ「ウデガって名前じゃないけど」

ソバツカス「牛太郎！」

ヤマビコ「牛若丸！」

さなぎ「じゃないけど、ま、そんな感じ」

カカシ「ウシって何だよ、自慢かよ、羨ましいぞ、このやろう」

ソバツカス「ウシの世話って大変でしょ？」

ヤマビコ「大変だよ、絶対大変！」

さなぎ「はは。まあ大変って言えば大変だけどね。朝早くから小屋の掃除して、水も取り替えて、掃除しても」

ソバツカス・ヤマビコ「くさそう」

さなぎ「くさいくさい。」

ソバツカス「フンとかすごいそう！」

ヤマビコ「すごいすごい！」

さなぎ「そりやすごいよ、大盛りの嵐だよ」

カカシ「なんでそんな楽しそうに話すんだよ」

さなぎ「なんでって。なんていうか、すごく懐いてくれてるからさ。すり寄ってきたりして。それがまたかわいいんだ」

ソバツカス・ヤマビコ「ジェラシー」

ソバツカス「その牛、メスなの？」

ヤマビコ「メスよね？」

さなぎ「メスカオスかなんて考えた事もなかった」

カカシ「ま、メスだろうな。」

さなぎ「なんで？」

カカシ「お前にすり寄ってくるぐらいだから。」

ヤマビコ・ソバツカス「きいいいい！」

カラーン、カラーン

さなぎ「あ、授業始まる。じゃあね」

さなぎ、去っていく。

ヤマビコたち、ぺったんぺったんとモチをつき始める

カカシ「(ヤマビコ達に) おい、何やってんだ、そんな体振るわせて」

ソバツカス「焼きもちやいてるのよ。そのメスウシに！」

ヤマビコ「あー、私もさなぎくんにスリスリしたい！」

カカシ「ほら、そんなにスリスリしたいなら俺にスリスリしたって」

ヤマビコ「きもい！」

カカシ「いたあ！」

ソバツカス「食べてすぐ横になったらウシになれるかしら」

ヤマビコ「なれるかしら！」

カカシ「なれるわけないだろ」

ソバツカス、カカシを殴る

カカシ「いたあ！なんで俺だけ殴られなきやいけないんだ！」

ソバツカス「なんで私たちはスリスリできないのかしら」

ヤマビコ「かしら！」

ソバツカス「あああああああ」

三人「もうううううううう」

三人、叫びながら退場。

照明切り替り、バケツがひっくり返され、

教室の中ようだ。

## 【第19場】

こまむすび先生「えー、ですからつまり、例えば、草の葉をバッタが食べる。そのバッタをカマキリが食べる。そのカマキリを今度はトカゲが食べる。その

トカゲを狸が食べる、狸を狼が食べる、というような生物と生物の間には、食べる食べられるの関係があつて、それを鎖のようにつながりだということから、これをー・・・」

まったく先生の話聞いてない様子のさなぎ

こまむすび「さなぎくん」

ひたすら何かを書いているさなぎ。

こまむすび「さなぎくん！」

さなぎ「え、あ、はい、はい（慌てて隠す）」

こまむすび「今何隠したの？」

さなぎ「隠してません」

こまむすび「隠してたでしょ」

隠しているものを取り上げるカカシ

こまむすび「ありやま！」

カカシ「こりやま！」

こまむすび「なんなの、この絵！？」

カカシ「なんじゃこりやあ」

ヤマビコ「ウシじゃないですか？わー、上手ですねえ。ねえ、先生」

こまむすび「今は何の時間ですかー？」

ヤマビコ「そうですねえ、人生において執行猶予の時間だと」

こまむすび「私はさなぎ君に質問してるの！」

ヤマビコ「(怯えて) ひいっ！」

さなぎ「返してください」

こまむすび「返してくださいじゃない。授業を聞いてない子にこれは返せません」

さなぎ「聞いてました」

こまむすび「じゃ先生、何て言いました？生物は」

さなぎ「えーっと、生物は、えー、食べる・・・」

こまむすび「食べる？」

さなぎ「食べる・・・また食べる」

こまむすび「食べ過ぎよ」

カカシが「飲む」ようなりアクションをさなぎに見せる

さなぎ「食べる、前に飲む！」



こまむすび「そうだね、食べる前に胃腸薬を・・・じゃなくて！そうじゃなくて！聞いてないでしょ。生物は、食べる食べられる関係で成り立ってるの。」

ソバツカス「先生、授業を続けてください」

ヤマビコ「続けてください、授業を」

こまむすび「お口チャック！」

ソバツカス「退屈な授業を続けてください」

ヤマビコ「続けてください、退屈を」

こまむすび「退屈って何よ！」

ソバツカス「さなぎくんは悪くないです。退屈な授業する先生が悪いんだと思います」

ヤマビコ「そう思います」

こまむすび「え、私のせい!？」

ソバツカス「先生、もう授業終わりましたよ、外の風、強くなってきましたし。」

ヤマビコ「終わりましたよ」

こまむすび「何言ってるの、このぐらいの風、どってことー」

ガラッと窓を開けるヤマビコ。新聞紙が顔にかかる。

こまむすび「あるっ！」

ソバツカス「今夜吹雪きます。そう天気予報のお姉さんが言っていましたし。」

ヤマビコ「言っていました！」

こまむすび「あなたのせいよ、さなぎくん。吹雪呼ぶし、落書きするし。作文

用紙はこんな落書きのためにー」

ヤマビコ「先生、さなぎ君を食べないでください」

こまむすび「先生、食べないわよ」

ヤマビコ「丸呑みしないでください」

こまむすび「どうして私が丸呑み？」

つまりはこういう事だよ。こいつらをさなぎが食べられる、さなぎは先生に食べられる」

こまむすび「食べないわよ！共食いしそうに見える、わたし？ねえ。」

さなぎ「・・・ああ、まあ、あの」

こまむすび「何その言い方。はっきり否定してよ！不安になるでしょ！もういい。授業終わり。後で親さんがたに報告しとくから」

先生、退場。

みぞれ「(独白) その日、学校から電話があり、授業中弟が落書きしていた事を聞かされました。ママは、すいませんでしたとひたすら謝っていました。私は、その落書きの絵がウシのすけだと聞かされた時、なんだか不思議と嬉しい気持ちになりました。」

【第20場 牛小屋】

さなぎ、牛小屋のドアを開ける

ガラガラガラ (SE)

と同時に、ひゅううううう、という音がでかくなる

みぞれ「(独白) 学校が終わると、家より先に牛小屋に立ち寄る。ここ数日、弟の生活サイクルはそんな感じでした。変わるもんですね、人っていうのは。最初の頃は、牛小屋を避けるようにして帰ってきたのに。」

ウシのすけの近くに寄るさなぎ。

さなぎ「うううう、寒い寒い寒い。ますます風が強くなってきたよ。参っちゃった。お腹空いてる？食べる？」

さなぎ、作文用紙を見せる。

さなぎ「わ、わ、ほんとに食べちゃダメ。食べちゃダメだってば！」

さなぎ、慌てて作文用紙をウシから取り返す。

さなぎ「危ないなあ。ダメでしょ、紙食べたら。ヤギじゃないんだから。」

もううう (何かうめき声に近い)

さなぎ「もうううはこっちの台詞だよ、ホントもう。(紙を見ながら) 今日作文用紙は白紙だよ。書かないとまずいんだけどさ。どう書いていいんだか。あ、言っちゃった、この作文の事？授業参観に書かないとダメなんだけどさ。ただ、テーマがなんていうか・・・パパのお仕事・・・何て書いていいかわかんなくて・・・(切り替えて) あ、ウシのすけって何か悩みとかあるの？ない？一人で寂しいとかさ。一人は退屈だとかさ、ぶっちゃけ干し草。パサパサしすぎなんだよ、とかさ。なんか悩みとかないの？僕は正直いちいち悩むよ。悩みを叫びたいよ、

地球の裏側まで届くほどの穴掘ってさ、いつまでいい子のままでいなきやいけないんだああああ、とかさ、どうして見たい番組が見れないんだああああ、とかさ、そんな事ばかり。ウシのすけはないの？羊を数えても眠れない夜は？」

ウシ、何か様子がおかしい。妙な動きをして倒れる。

さなぎ「ウシのすけ、どうしたの？ウシのすけ・ウシのすけ！」

みぞれにスポット

みぞれ「(独白) 牛小屋の方で、そんな風に叫ぶ弟の声がして、私と父はすぐに向かいました。飼った事のある人ならご存知だと思います。ウシってーのは非常にデリケートな生き物なんですよね。だから何かにつけて病気になる。ちょっとした外的要因で、すぐストレスを貯める。その時のウシのすけも数日続いた寒波のせいで体調を崩したようでした。」

独白の間に、牛小屋に顔を出すタモツ。

倒れているウシのすけ。それを心配そうに見てるさなぎ。

タモツ「こりやクネル先生に見てもらった方がいいな。」

みぞれ「この時間、起きてないでしょ」

タモツ「ちよつと迎えに行ってくる」

さなぎ「電話すればー」

タモツ「残念ながら、先生んちは電話がないんだ。」

タモツが去ろうとすると

さなぎ「あ、僕も行く！」

みぞれ「さなぎは行かなくていいよ。今夜は吹雪くから」

さなぎ「こんな風すぐ止むよ！」

みぞれ「危ないって」

さなぎ「行きたいんだよ！」

走り去るさなぎ。追いかける父、退場

みぞれ「私はその時はじめて弟の自己主張を目の当たりにしました。」

別の場所に登場する父。照明カットチェンジ。

【第21場 夜の道】

さなぎと父のところへの照明。

ひゅおおおおと激しく吹く風。

何度か風に揺さぶられ、右へ左へと移動するさなぎ

父の手に捕まったり、オンブをしてもらったりして、

なんとか向かい風に立ち向かう。

みぞれ「(独白) 吹雪は止むどころか、ひどくなっていく一方でした。ゴウゴウと音を立てる山の木々。異常な速さで流れていく夜の群雲。そんな中、父とさなぎは、数キロ離れた医者を呼びにいきました。」

【第22場 クウネルの家】

※タモツ、さなぎ、先生の元へたどりついた時には、

雪が頭にどつきりつもり、顔からツララが垂れている。

ドンドンドン

強い風が吹き荒れている

タモツ「クウネル先生！開けてください！」

ドンドンドン

タモツ「寒い！クウネル先生！寒すぎる！」

さなぎ「開けてください！」

タモツ「やぶ医者！」

奥からやってくる腰の曲がった先生

クウネル「誰がヤブ医者じゃ」

タモツ「嘘ですよ、クウネル先生。ちよつと来てもらえませんか？」

クウネル「なんだ、こんな夜中に誰かと思つたら」

さなぎ「動物のお医者さん！今すぐ来て！早く！」

クウネル「誰だ、お前さんは。それに今何時だと思つてー」

さなぎ「早く！」

クウネル「痛い痛い、肉を挟むな肉を」

さなぎ「早くう！」

医者の手を強引に手をひっぱるさなぎ、父とともに退場。

みぞれ「弟たちはお医者さんの手を引っ張り、野を超え、川を越え、ひん曲が

った、何の意味もなさなくなった傘を差しながら、風神のごとくまい戻ってき  
ました」

※やがて、独白の途中に再びさなぎと父が登場。

突風に煽られた傘を持ちながら走っている

(スローモーション)

### 【第23場 牛小屋】

ガラガラガラガラ。

さなぎ「こつちです！動物のお医者さん、早く！こつち！早く！」

クウネル「ちよ、ちよつと待てい、坊主、はあ、はあ、殺す気か、はあ、はあ、  
お医者さんがお医者さんのお世話になるだろう」

さなぎ「お願いします。ウシのすけ、助けてください！」

クウネル「今から診察するから。急かすな急かすな。ヅラをづらすな」

さなぎ「先生、助かりますよね！」

クウネル「おい、タモツ、この坊主、あっち連れてつてくれんか」

タモツ「(さらに激しく)先生、助かりますよね！助かりますよね！」

クウネル「親子そろってこの有様」

みぞれ「ほら！先生の邪魔しない！」

みぞれ、タモツとさなぎの首根っこをひっぱり退場。

医者は、ウシのすけの診察に入る。

照明消えて、別の場所に照明。

### 【第24場 家】

その場所に慌ただしくさなぎ登場

行ったり来たりしている。

みぞれ「もう寝なさい。こういう時は羊を数えて寝たらいいよ」

やがて踞るさなぎ。

さなぎ「(祈る)ウシのすけ、ウシのすけ、ウシのすけ」

近寄る父、さなぎの手を握る。

タモツ「大丈夫。全部大丈夫だよ」

父、さなぎの手を握る。

さなぎ「……………」

さなぎ、タモツの手を握りかえず。

みぞれ「(独白) 一晩中、吹雪は続きました。羊を数えても眠れないさなぎのソバに、お父さんはずっと付き添っていました。時折、泣き出しそうになるさなぎの手をずっと握っていました。私はというと、ヨダレを垂らして爆睡していました。そうして明け方―」

吹雪が止む。

みぞれ「(独白) 吹雪はようやく過ぎ、疲れた表情を浮かべたお医者さんが、牛小屋から出てくると、さなぎは真っ先にそのお医者さんの近くに駆け寄りました」

### 【第25場 牛小屋】

さなぎ「ウシのすけ！」

医者を通り越して、ウシのすけの元へ

さなぎ「お、お医者さん、あの、ウシのすけは！ウシのすけは！」

クウネル「大丈夫、もうじきよくなるよ。風邪をこじらせただけだ。」

さなぎ「本当ですか！」

クウネル「嘘言ってどうすんだよ」

さなぎ「よかったね、またモリモリ食べようね！モリモリウンコしようね！！」

さなぎ、ウシのすけをなでる。

みぞれ「ウシのすけが助かって、弟は手放しで喜びました。喜んでるその瞬間、弟の頭には、次の日が授業参観だと言う考えはすっかり抜けていました。弟の作文用紙は依然、白紙のままでした。」

### 【第26場 学校】

カーテンカーラン。カーランカーラン

照明、学校のような照明に。

カーテンレールのようなものが敷かれ、

舞台奥、一斉に父親たち(切り絵かシルエット)が浮かぶ

先生が口パクで何かを話す。手をあげる全員。  
さなぎだけは手を挙げない。

みぞれN「結局、さなぎに気を遣ったお父さんは授業参観に行きませんでした。私は、さなぎの担任にこっそり会い、さなぎの作文が白紙のままの理由を説明しました。お姉ちゃんっぽいでしょ？だからさなぎは無難に授業参観日を終える事が出来ました。」

さなぎ、白紙のままの作文を未だ見つめる。

みぞれN「ウシのすけとのお別れ。それを弟が知ったのは、それからまた数日後の事でした。」

照明チェンジ。

## 【第27場 家】

ちやぶ台を囲み、深刻な表情の3人が座っている

みぞれ「・・・じゃ、それで決定。いいよね、お父さん」

タモツ「うーん」

みぞれ「何、まだ何かあるの？こういう事ちゃんと教えたほうが将来絶対さなぎのためだって」

ヨツバ「私もその方がいいと思う」

タモツ「いや、まあ。そうかもしれないけど・・・誰がさなぎに伝えるの？」

みぞれ「誰って・・・そりゃ、まあ。(タモツを見る二人)」

タモツ「え、その目はもしや!？」

みぞれ「じゃ私言おうか」

タモツ「あ、それはダメだ、絶対ダメ」

みぞれ「何でよ」

タモツ「みぞれが言うと、角が立つ。ニトロもって戦場の最前線に出るようなもんだ。」

ヨツバ「じゃ私が言おうか」

タモツ「うーん、それもなー」

みぞれ「(独白) 父は悩んでいた。最終的なジャッジが、あみだくじという原始

的な手段を選ばざるを得ないほど悩んでいた。」

クジをひく3人。アタリをひいた母を見つめる二人。

みぞれ「(独白) 誰が当たっても文句なしのクジを引き当てたのは、結局、母だった」

タモツ「……………」

照明切り替る。

さなぎ、やってくる。

さなぎ「で、…大事な話って何？」

ヨツバ「あのね、ウシのすけの事なんだけど」

さなぎ「…うん」

ヨツバ「来週、ウシのすけとお別れなのよ」

さなぎ「え?…」

みぞれ「ま、期日はきまってはいたんだけど」

みぞれが話そうとすると、父が制する

さなぎ「どういうこと？」

ヨツバ「だから来週には、ウシのすけ、ここから別の場所に行くの」

さなぎ「何処へ行くの？」

ヨツバ「工場よ」

さなぎ「工場?何の工場？」

ヨツバ「食用のウシだから。」

さなぎ「食用のウシ?え!?食用!?それってウシのすけを食べるってこと?」

みぞれ「親戚のおじさんの手が回らなくて、一時的に預かっただけだから。」

みぞれの口を塞ぐ父

さなぎ「嘘だったの、ペットだって」

ヨツバ「ペットよ。ペットだって、いつかはお別れが来るでしょ」

さなぎ「ペットを食べるなんて聞いた事ないよ、そんなのありえないよ」

ヨツバ「ありえるでしょ。さなぎだってお肉食べるでしょ。」

さなぎ「それとこれとは」

ヨツバ「一緒よ。あんたが知らないだけ。お店に並んでるスライスされた肉も

最初はみんな生きてた動物なんだから」

さなぎ「じゃ、屠殺場に行くってこと」



ヨツバ「そうよ。」

さなぎ「お父さん！お父さんはウシのすけも殺すの？」

ヨツバ「別にパパが殺すわけじゃ」

さなぎ「お父さん、ウシのすけの事、大丈夫だって言ったの、嘘なの！」

ヨツバ「お父さん一工場員なんだから。一人で判断出来る問題じゃないの！」

さなぎ「殺し屋だ・・・」

ヨツバ「さなぎ」

さなぎ「お父さんは殺し屋だ！」

ヨツバ、思い切りビンタする

さなぎ、一瞬止まる表情。かと思うと、大声で泣き出す。

さなぎ「どうして！どうして僕が叩かれなきゃいけないんだよお！！」

みぞれ（独白）それからさなぎは、ひたすら、どうしてだと泣きわめいていました。声を枯らしても尚、ずっとその場に踞っていました。確かに、どうして、です。だけでもうこれは、どうしてもなんです」

退場している父と母。

## 【第28場 家・夜】

照明、変わっている

一人、踞ってるさなぎ。

そんなさなぎを遠くから見つめているみぞれ

みぞれ「・・・無力よね。子供って。ほんと無力。」

さなぎ「・・・」

みぞれ「ま、私たち子供なんて、大人の事情で運命が決まるもんだから。だいたい私たちが突然姉と弟になるのだからっておかしいでしょ。とってつけたかのようなさ。インスタントラーメンじゃないんだから、うちらは。」

真っ赤な目のさなぎ、少しだけ身を起こす。

みぞれ「あれ？私が人なつっこくて誰とでもすぐ仲良くなる人種だなんて思ったりした？言っとくけど、私は、あんたより百倍人見知りの自信あるから。お母さんって呼ぶのだからってまだ抵抗あるしね。けど、そういうわけにはいかない

でしょ。あたしたちはあの二人にご飯食べさせてもらってるんだから」

さなぎ「オネエちゃんは、悔しくないの？」

みぞれ「悔しかったらあんた自立しな。私は無理。自立しようとしたけどね。ここだけの話、私もあんたみたいにお父さんの事、ほんと嫌いになってさ、あんたみたいにお父さんの仕事が嫌で嫌でしょうがなくてさ、それで一回家出したんだ。けど無理だった。一人で暮らせない。路頭に迷った挙げ句、変な人に連れ去られそうになって三日で帰ってきたもん。その時、思ったね。大人つてすごいって。親つてすごいって。嫌な仕事でもせつせと働いて、私たち養ってくれてんだよ。あんた飛び出しても、ちゃんとご飯作って待っててくれるんだよ。すごいよ、ほんと。ありがたいこつてすよ」

さなぎ「・・・」

みぞれ「大人も大人で大変なのよ。だから私もわがまま言わないよ。どういう理由だろうと、私はもうお姉ちゃんなっちゃったから。お姉ちゃんっぽいでしょ、こういう発言。わかったらもう寝な。寝るしかないんだよ。じゃあね、バカ弟。おやすみ。」

みぞれ、退場。

さなぎ「(独白) 姉のような女子とは、できれば近づきたくない。その時まではその思った。だけど、姉も姉で色々思ってる事はあるようだ。」

少し離れた場所でみぞれのスポット。

みぞれ「(独白) 私が去った後、弟は全力で考えていた。」

## 【第29場 モノローグ／牛小屋】

またさなぎのスポット

さなぎ「(独白) 田舎つてのは容赦がない。色んな意味で僕はむき出しにされる。僕は、山奥で冬眠する動物たちの寝顔を知らない。風に乗って春を運ぶ花の名前を知らない。前の街じゃ何でも知ってた。何でも出来た。でもそれはきつとそういう気がしただけ。何でもできる気がしただけで、本当は何も出来ていない自分に焦点が当たらなかつただけかもしれない」

みぞれ「これから自分に何ができるのか。弟は、ウシのすけを救う最善で最高の必殺技を編み出そうとしていた。」

さなぎ「ひらめけ、いい事ひらめけ・・・！」

さなぎ、何か思い立ったかのように立ち上がる。

と同時に音も照明も切り替る。

みぞれ「それは真夜中の出来事だった。牛小屋の扉が開くような音がした。私はその音で目を覚まし、暗がりの中、牛小屋の方へと向かった。」

みぞれ、懐中電灯を持ちながら、ぐるっと一回り。

みぞれ「・・・あれ、小屋の扉開いてる。ウシのすけ。・・・ウシのすけ？」

懐中電灯で奥へと足を運ぶ。

みぞれ「大変、ウシのすけがいらない！お父さん、お母さああああん！」

みぞれ、退場。

照明カットチェンジ

### 【第30場 海岸線付近】

波の音が聞こえる。そこは海岸線のようにだ。

ウシを引き連れた大荷物なさなぎが登場。

さなぎ「(押しながら)ウシのすけ、ほら、坂道昇って。ほら、もうちよい！でつかいお尻だなあ、ほら、ウシのすけ。(坂を上りきったようだ)はあ、はあ、はあ、はあ。(後ろを意識しながら)えっと、ここまでくりやもうね。ここまではあ、はあ。綺麗な星。満天だね。僕らの逃げ道をライトアップしてくれてるんだね。大丈夫。気分は上々さ。絶対に、ウシのすけは食べられたりしないから。任せて」

さなぎ、ウシを引き連れ退場。

と、同時にみぞれたち別の場所から登場。

### 【第31場 牛小屋】

みぞれ「ほら、早く早く見て」

みぞれに連れられてやってくる父、母

タモツ「(周りも探して)ホントだ・・・いない」

みぞれ「さなぎが連れ出したんだと思う。」

ヨツバ「え？さなぎもいないの？」

みぞれ 「さつき部屋行ったら荷物ごと消えてた。」

タモツ 「連れ出したって何処へ？」

みぞれ 「それがわかってたらとっくに見つけてるよ」

タモツ、外へ出て周りを見渡す。

タモツ 「探してくる。遠く行っただとしたらホントに戻って来れないだろ」

照明カットチェンジ。

### 【第32場 海岸付近】

風がゆっくりと音を立て始める。

ウシをつれたさなぎ、再登場

さなぎ 「あ、ウシのすけ。雪だよ。・・どうりで寒いはずだよ。よし、あそこまで行こ。ほら、あそこ。洞窟みたいなのあるよ。あの中なら寒さもしのげるはずだよ。ほら。」

※前にクラスメイトとかに教えてもらった秘密基地。

### 【第33場 道】

みぞれたちのいる場所。

ヨツバ 「雪・・」

タモツ 「まずいな、こりやまた吹雪くぞ」

みぞれ 「凍えちゃうよ」

タモツ 「心当たりは？」

みぞれ 「全然わかんない。さなぎだって検討ついてないと思う」

タモツ 「このまま吹雪くとわかったら、とにかく寒さをしのぐうとするだろうな。」

みぞれ 「さむさもしのげて、ウシのすけも一緒にいれるとこ・・」

タモツ 「しらみつぶしだ」

みぞれたち、退場。

ぴちよん、ぴちよんという音。

さなぎとウシのすけ、登場。

### 【第34場 洞窟】

(以下、声が響く)

さなぎ「(震えながら)うわあ。すごいなあ、どこまで奥あるんだろう。ここらへんでいいか。(座り込む)いいよね、この中。風も吹かないし。全然寒くないよね。へーくしよい。ぶるるる。はは、平気平気、寒いからじゃないから。あ、そうだ。これ、こするとあったかくなるやつ。ほら、魔法だろ。僕はね、魔法使いの弟子だから。」

さなぎの横に座り込むウシ。

ゆっくりと照明、落ちていく。

暗転

ぴちよん、ぴちよん、という音。

遠くでは、ひゅおおおおと依然続く吹雪。

やがてマッチを擦る音。火が灯る。

さなぎ「・・・また外は吹雪いてきたんだね。けど明日の朝になったらきつと止んでるよ。そしたらさ、ここ抜け出して遠い国行こう。ふふ。内緒だけど僕の夢はパイロットなんだよね。」

ギョルルル

さなぎ「・・・ウシのすけ、お腹空いてる？あ、そうだ・・・(ポケットに手をつっこみ、パンを取り出す)あった！ぺっちゃんこだけど！食べて元気つけな、ペチャパン。はは。これ美味しいんだよ」

パンを半分に分ける。

さなぎ「・・・」。

均等ではないパン

さなぎ「はい、おつきい方！(と大きい方を渡す)ウシのすけ、でかいからね。食べないと。食べられちゃうよ。うがー」

もー

さなぎ「嘘嘘。ウシのすけを絶対食べさせるもんか。けどさ、僕にはわからないよ。ウシのすけ、本当は知ってたんだろ。自分が食べられるって運命だって。」

それなのに、どうして今まで逃げなかったの。どうして食べられる運命だつてわかつて、どうして平気な顔してモリモリウニコしていたの。ウシのすけがその気になれば、あんな牛小屋すぐに壊してき、何処でも逃げられるはずでしょ。なのにどうしてなの。ねえ？」

もー

さなぎ「そうだよ。君の答えはいつだって「もー」だよ。嬉しい時も、悲しい時も、何を聞いても、いつものもー、なんだね。そうやって、何て事ないって顔していつもソバにいてくれるんだよ。僕が泣きわめいた夜だつてずっと・・・」

もー

さなぎ「寒くないかい？僕は平気だけどさ、なんか、眠くなつてきちやった・・・どっかの映画とかで見た事あるんだよ。こういうシチュエーションで眠るとね、次の朝、もう二度と目を開ける事が出来なくなるんだよ。だからねこんな洞窟で寝るわけには・・・。寝ちゃダメなんだよ。絶対。ね、ウシのすけ」

もー

さなぎ「夜が明けたら、遠い世界に連れてってあげるから。心配無用さ。僕はね、パイロットになる男だよ・・・だから遠い世界へ・・・どこがいい？・・・そうだね、もう少しあつたかい国がいいかな・・・」

ゆっくりと眠りにつくウシとさなぎ。

同時に、照明もフェイドアウト。やがて暗転。

さなぎ「はー！」

と目を覚ますと、そこは別の場所。

【第35場 家】

ヨツバ「さなぎ・・・気がついたの？わかる？」

さなぎ「あれ・・・ここは・・・(周りを見渡す)」

みぞれ「(独白)目を覚ました弟は、自分がまだ家に運ばれた事を知らない。」

ヨツバ「助かったのよ。」

みぞれ「あんたミラクルボーイだよ」

さなぎ「ミラクル・・・」

ヨツバ「待ってて。お父さんとお医者さん、呼んで来る。隣の部屋にいるから。」

みぞれ「(独白)さなぎの意識はまだぼんやりとしていた。色んな事がまだ整理の付かないままだった」

ヨツバ、タモツを連れて再登場。

さなぎ「・・・お腹すいた」

タモツ「そうだろ、ずっと彷徨ってたもんな」

ヨツバ「美味しいもの食べて、栄養つけないとね」

さなぎ「うん・・・美味しいもの、お腹いっぱい・・・」

みぞれ「(独白)それから弟はまた眠りにつきました。再び目を開けたのは夕方六時をまわった頃でした。食欲あるなら平気だよと言ってお医者さんは帰っていきました。」

スポット消えていく。

ゆっくりと暗転。

再び明転。

### 【第36場 家・次の日】

料理を作っている母の動き。

さなぎはもうすっかり元気になってる

さなぎ「後何分ー」

ヨツバ「もうすぐだってばー」

さなぎ「後何秒ー」

ヨツバ「待ってなさい。もう出来るから」

みぞれ「(独白)部屋一杯に広がるいいニオイ。お肉の焼けるニオイ。次の日、奇跡的に生還した弟へのささやかな復活祭をした。」

みぞれの独白の間に、食卓テーブルに用意される料理。  
着席する家族四人。

3人「いただきますーす！」

目の前の料理を食べ始める四人。さなぎは、圧倒的な早さ

さなぎ「うまい！」

ヨツバ「ちゃんと、いただきます、言った？」

さなぎ「ふまい！」

ヨツバ「味わって食べなさい」

さなぎ「味わってるよ。はーこんなごちそうどのくらいぶりだろう。はー、毎日こんな美味しいお肉だったら、ウシのすけにも・あ、そうだ、ウシのすけは？」

間

さなぎ「何急に黙って・ちよつと牛小屋行ってくる」

ヨツバ「さなぎ！」

止まるさなぎ

さなぎ「なに？」

ヨツバ「・ウシのすけとは、お別れしたよ」

さなぎ「え！？」

牛小屋の方を見るさなぎ。

さなぎ「牛小屋にもういないの！？」

ヨツバ「前に伝えたでしょ」

さなぎ「何で教えてくれなかったの？」

みぞれ「教えるも何もあんた寝てたでしょ、長い間」

さなぎ「今何処にいるの？」

ヨツバ「ま・食事が終わったら話そうと思ってたんだけどね」

さなぎ「今教えてよ」

ヨツバ「あのね、驚くかもしれないけど」

さなぎ「驚かないから早く教えてよ！ウシのすけ、今どこなの？」



みぞれ「この肉よ」

さなぎ「え」

みぞれ「この肉」

お皿の上のお肉に視線を落とすさなぎ。

さなぎ「え？このお肉！？え、お肉！？え！？モ、モ、モ」

みぞれ「さなぎがおいしいって食べたお肉よ」

さなぎ「待って。混乱してる。え、なに？なに、え、どういうこと！？」

みぞれ「なんでそんな混乱するの。お肉大好きなんですよ、ブタだってウシだってトリだって」

さなぎ「僕は、ウシのすけを食べたの！？」

みぞれ「食べたの。美味しかったって言ったでしょ。」

さなぎ「いや・それは・違うよ、違うよ」

みぞれ「違わないよ。みんなもともと生きてたの。ウシのすけみたいに育てられ、食べられるの。食べるために育てたの。そして食べたのよ。」

さなぎ「おかしいよ、そんなの、おかしいでしょ」

みぞれ「じゃさなぎは、これからお肉一生食べないのね」

さなぎ「いや、そうじゃなくて・・・」

みぞれ「じゃどういうこと？ウシのすけなら食べられなくて、他の動物なら食べられるって言うの？それこそおかしいでしょ？命の重さに違いがあるの？」

さなぎ「・・・ウシのすけ・ウシのすけ・・・」

さなぎ、その場に座り込む

タモツ「僕らが発見した時には、さなぎより、ウシのすけの体の方がずっと冷えきってたんだ。」

近づこうとすると、さなぎ、体を反らす

タモツ「・・・ウシはそれほど寒さに強い生き物じゃない。けどさなぎ。さなぎを寒さからずっと守ってくれてたんだよ。動物のお医者さんに見てもらった時

にはもう手遅れで。だからもうどのみちお別れしなきゃいけなかったんだ」

さなぎ「嘘だ」

みぞれ「嘘だと思ったらお医者さんに聞いてみなよ。」

タモツ「(みぞれを制して) けどそんな朦朧とした意識の中で、ウシのすけは言ったんだ。腹ぺこのさなぎを元気にしてあげたい。食べてもらいたいって。」

みぞれ「だから私が提案したの。せっかくだからウシのすけをみんなで食べようって。誰か知らない人に食べられる前に、みんなでモリモリ、ウシのすけのおいしいところ、ただこうって。その方が絶対ウシのすけ喜ぶだろうって。それでお父さん、工場長に無理言って、ウシのすけの一番美味しいところ譲ってもらったんだよ」

さなぎ「……」

ヨツバ「今日は好きだけ泣こ。でもそうやって泣いた事も、時が経つと忘れちゃうんだよ。だからね、さなぎ。だからせめてちゃんといただきますって言う。うちらはさ、うちら以外の命を食べて生きてるんだから。」

さなぎ「……」

ゆっくりとみぞれのスポットへ。

みぞれ「(独白) 弟は、もう何も言い返さなくなりました。」

立ち尽くすさなぎ、やがて動き出す。

みぞれN「それから弟は、牛小屋に向かい、ウシのすけのいなくなった干し草の上に寝そべって、ただひたすら天窓から見える月を眺めていました。私たちのお腹の中には、まだウシのすけの感触が残っていました。胃袋の中のウシのすけは、これからゆっくりとゆっくりと長い時間をかけて、私たちの栄養になっていくんだ。その事を弟は噛み締めていたのかもしれない。」

みぞれのスポット消えていく。

辺りは静寂に包まれる。

月明かりのワラの中、寝そべっているさなぎが映し出される。

さなぎ」…いつだったかな。こうやって干し草の上で一緒に眠った日。寒かったね。僕は、ウシのすけの中で、ウシのすけの音を聞いたんだ。とくんとか。ゆつくりと、ゆりかごのように動くウシのすけの鼓動。それを聞きながら僕は、眠ったんだ。とくん、とくん。とくん、とくん。そのウシのすけをボクはいただいたんだね…。いただいたんだね…。こんな事言う可不謹慎感かもしれないけど…。すごく、おいしかった。ほんっとおいしかったんだ。…。いつかママが言った言葉の意味がようやくわかったよ。食べる時に、手を合わせて、いただきますって言いなさいって。食べ物に感謝しなさいって。今更だけど、本当に今更だけど…。ボクはね、今ボクはね、心から、いただきます！って言える気がするよ。ボクたちは、ボクたち以外の命を食べて生きてるんだね。…。ありがとう…。いただきます。…」

(おしまい)